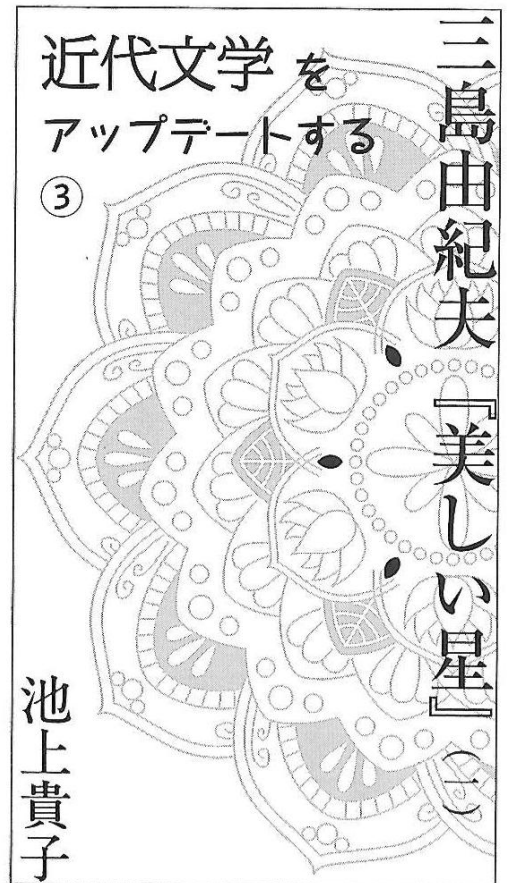




はじめに 三島由紀夫を別ルートから読んでみる

現代において近代文学を読むということは、作品の時代背景にあるイデオロギーや社会状況、制度などを理解した上で、作家の思惑をあえて踏み越え、現代の受け止め方に読みをアップデートすることではないだろうか。読みの過程で、当時は理解されなかった作品が、現代に新たな意味を持ち輝くこともあるだろう。その価値を見出し次代へつなげるのは、読み手の責任だ。そして今、アップデートしたい作家(の一人)は、三島由紀夫なのである。

三島は、日本特有の美意識や古代天皇制に基づく思想を世界に発信した功績もあり、海外でも評価の高い作家だ。

しかし、その作品や作家本人を考察しようとすると、あの市ヶ谷駐屯地での総監室占拠とその果ての割腹自殺とを「解答」として捉えてしまっていないだろうか。たとえば、「金閣寺」(一九五六年一月〜十月)、「憂国」(一九六一年一月)、「英霊の声」(一九六六年六月)、『文化防衛論』(一九六九年四月)、「豊饒の海」(一九六五年九月〜一九七七年一月)のラインで古代天皇制への回帰的な思想やナルシズムを含む独自の美学が読まれ、市ヶ谷の自決がその解答として示されるように。おそらく、「死の覚悟」を決めた三島「本人」が、自衛隊員を前に「演説」までしたという「事実」が、事件前後の言説を「純然たる三島の真実」のように捉えてしまうからだろう。たとえば文芸評論家の磯田光一は、これまでの三島の思想や美学の究極の形として、その死を「戦後の時代風潮に対する逆説的プロテスト」、「極限的な象徴的行為」だと分析している¹⁾。

それらの解釈を否定するわけではないが、新しい時代に向けてアップデートするためにも、別のルートを掘り起し、三島文学をさらに補強してみたいのである。三島は知識人としての興味関心の幅が広く、社会の暗部も含む深い文化理解を併せ持ち、若者の流行やエンターテインメント、アングラ文化、世界情勢などを盛り込んだ作品群を多く手掛けている。世界への貪欲な興味をもって情報を詰め込まれ

たこれらの作品は、純文学というカテゴリに捉われず、従来のやや単線的な解釈に別ルートを出現させるかもしれない。

そのために、アップデートの可能性という観点から注目したい作品がある。現代の社会状況にも重なる、米ソ冷戦期の連載において、水素爆弾（以下「水爆」）をめぐる世界的危機を、ほかならぬ「宇宙人」の視点から描き、当時の文壇を大いに困惑させた『美しい星』だ。

一、人間のフリをした宇宙人か、宇宙人と思ひ込んだ人間か

『美しい星』は一九六二年に「新潮」一月号～十一月号に連載され、同年十月に単行本として発行された。作品の舞台は、アメリカとソ連が水爆を巡り緊張状態にある冷戦時代で、高度経済成長期にある日本だ。

元材木商の大杉家では、家人全員が各々空飛ぶ円盤に遭遇し、当主の重一郎は火星人、妻の伊余子は木星人、長男の一雄は水星人、長女の暁子は金星人としての意識に目ざめていた（身体は「地球人」であった）。一家は、重一郎が交信している「宇宙」から与えられた使命として、鈍化し墮落した地球人を導く活動を開始する。やがて水爆により破滅へと向かう地球を救うために、重一郎は敵対する宇宙人の「羽黒」と大論争を繰り広げることになる。しかし

熾烈な死闘に倒れ、末期の胃癌が悪化した重一郎は、同じく挫折や失望を抱えた家族とともに、「宇宙」の指示により、地球から脱出するために円盤のもとへと向かっていったのだ。

さて、粗筋だけでも本作が奇抜な設定を詰め込んだ、三島作品の中でもかなりの異色作であることがわかるだろう。発表当時、三島の良き理解者であった奥野健男は、本作を「明治以来の日本の近代文学にかつてなかった型破りの小説」と高く評価しつつも、「純文学の世界に、宇宙人とか、空飛ぶ円盤とか、いわばいかげわしいものを持ち込んだこと」を危惧していたほどだった。後年、三島自身も説明の必要を感じてか、一九六四年一月十九日の「読売新聞」に、『空飛ぶ円盤』の観測に失敗して——私の本『美しい星』という小文を寄稿し、作品執筆の動機や設定について思わぬ種明かしをしている。

この小説を書く前、数年間、私は「空飛ぶ円盤」に熱中していた。北村小松氏と二人で、自宅の屋上で、夏の夜中、円盤観測を試みたことも一再にとどまらない。しかし、どんなに努力しても、円盤は現はれない。少なくとも私の目には現はれない。そこで私は、翻然悟るところがあり「空飛ぶ円盤」とは、一個の芸術上の観念にち